

『遺伝子変異』が見つかりました !!

ふくおか肺がん患者と家族の会「コスモス」代表の片山です。

2018年の秋に肺がんの宣告を受け、治療が始まって、今年は6年目になりました。

5年後に、こんなに元気で生活できているなんて、夢にも思わなかったです。

毎日のように、気合を入れて「絶対に生き続ける」と念じて、平静を装って過ごしていましたが、時々不安にさいなまれている日々でした。

なぜなら、私は遺伝子変異が陰性だったからです。

治療開始時に受けた遺伝子検査（Oncomine Comprehensive Assay、LC-SCRUM）の結果が、見事に全て陰性でした。

ステージIVの肺癌宣告より、この遺伝子変異が全く無いという現実の方がショックでした。

2018年当時は、遺伝子変異陰性＝細胞障害性抗がん剤という時期でしたので、抗がん剤にはマイナスのイメージしかありませんでした。

幸いなことに、1次治療は、細胞障害性抗がん剤＋血管新生阻害剤＋免疫チェックポイントの治療に参加でき、約4年間、命を繋ぐ事ができました。

しかし、2022年の夏に耐性がでて、再燃・転移…残念ながら治療は終了しました。

2次治療の細胞障害性抗がん剤治療が始まりました。この薬は約1年で効かなくなり、再燃と転移、副作用も強く、2023年夏に終了！

いよいよ3次治療になりました。「3次治療」…私の中では、イメージが大変悪い響きです。

使える治療薬も少なくなり、そろそろ命の限界が見えて来たのでは…と不安がつりました。

そんな中で、治療開始から、5人目に当たる現在の主治医から、遺伝子パネル検査の提案がありました。

癌の検体をしっかり確実に採取するために、胸腔鏡での手術が必要との事でしたので、迷う事なく、手術をお願いしました。

パネル検査はNCCオンコパネルシステム（OncoGuide™ NCCオンコパネルシステム）とがんゲノムプロファイル（FoundationOne CDxがんゲノムプロファイル）の2択でしたが、私は後者を選びました。理由は解析できる遺伝子が300種類ぐらいと多かったからです。

2次治療の抗がん剤が終了しており、無治療期間が延びる事で、癌が進行するのではと不安でしたが、遺伝子パネル検査に挑戦しなかった事の後悔より、挑戦して遺伝子が検出されない結果の方が、これから癌治療に向き合っていく上で、納得できると思い、パネル検査に挑みました。

実は、胸腔鏡手術の痛みがしばらく続いたので、検査にトライした事を後悔しそうな時もありました。

検査結果を待たずに始まった3次治療の細胞障害性抗がん剤治療に、淡々と向き合う日々の中で、数パーセントの確率でしか遺伝子変異が見つからないパネル検査の結果を、あまり期待せずに、待ちました。

そんな中、胸腔鏡手術から7週間程たった頃、主治医から連絡が来ました。

遺伝子変異が見つかったとの事…！EGFRの遺伝子が見つかりました。

5年目にして、今更、EGFRの遺伝子が見つかるの…？と狐につままれたような気持ちでした。実は、私のEGFR遺伝子はメジャーな変異（エクソン19欠損変異）の中でも、とても稀な遺伝子で、5年前の遺伝子の検査システムでは見つからない遺伝子で、がんゲノム医療での遺伝子パネル検査だから見つかったとの事でした。

これからの治療では、分子標的薬が使える！絶対に不可能だと諦めていた、私にとっての夢の薬を飲む事が出来るのです。嬉しくて、医学の進歩に心から感謝しました。

早速、細胞障害性抗がん剤から分子標的のEGFR阻害剤タグリッソ（オシメルチニブ）に変更になり、現在、治療が続いています。

タグリッソ（オシメルチニブ）がどこまで効くかどうかは、わかりません。

しかし、薬の数が増えたおかげで、命を繋げられるという希望があります。

最新のゲノム医療の進歩を体感できた私は、幸運だとつくづく思います。

5年前、罹患したばかりの時、主治医から、私の癌は完治が無く、維持するのみだと伝えられました。

当時は、意味が理解できず、絶望しましたが、患者会活動を通して、他の患者さんの体験談を聞いたり、セミナーを視聴したりして、肺がんに対する知識を深めました。

この5年間、自分の癌と向き合い、肺がんの知識を得た事が、遺伝子パネル検査への導きとなったと思います。

また、主治医との出会いも大きく、主治医が変わるタイミングで、自分の癌の状況をじっくり相談する時間が持てた事が、本当に良かったと思います。

これからも、医学の進歩のおかげで、新しい薬に出会えるという可能性に期待しながら、癌と共存して生き続けたいと思っています。